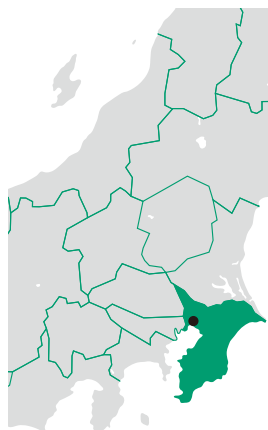


島田 慎一さん

バスケット男子Bリーグチェアマン 肉牛1頭を飼い千葉県の農業を支援

千葉県船橋市
株式会社千葉ジェッツふなばし 前会長



プロバスケットボール男子Bリー

グのチェアマンに就任した島田さんは、2019年の暮れから肉用牛を1頭飼っている。畜産についての情報を発信し、畜産農家を元気づけ、支援するためだ。島田さんは、経営不振だったバスケットボールチーム「千葉ジェッツ」を人気ナンバーワンに立て直したことで知られ、その経営手腕に学ぶことは多い。

苦境の農畜産業を支援

——7月からBリーグのチェアマンに就任されました。それまで、千葉県船橋市を本拠地とするプロバスケットボールチーム「千葉ジェッツふなばし」の会長でした。2019年12月から、肉用牛を1頭飼育しているのですが、どんないきさつがあ

ったのですか。

島田 19年11月、千葉県内で開かれた農畜産業者の集まる講演会に呼ばれました。交流会で畜産農家から台風15号の被害が大きく、たいへんだという話を聞きました。「私にできることはありませんか」と言ったことから、私が牛を1頭飼うことになったのです。即断即決です。

道楽ではありません。牛を育てる過程だったり、畜産農家のがんばっている姿だったりを継続的に情報発信するためです。牛のことや農家のご苦勞を、少しでも多くの人に知ってもらうことで、農畜産業のPRや支援になればと考えたのです。

——実際に飼うのは大変ですね。

島田 費用はすべて私がかかりますが、実際の飼育は、千葉県旭市で肉用牛

と酪農を経営している岩淵畜産さんにお任せしています。

飼う子牛は、私も立ち会って10頭の中から選びました。その中に19年5月29日に生まれた元気な牛がいて、誕生日が「ゴー・ニク」と読めたので、その子に決めました。

交雑牛で金メダルめざす

——「しまちゃん」という名前を付けたそうですね。

島田 私は専門家でないのですが、品種のことはわからないのですが、「しまちゃん」と名付けた私の牛は交雑牛だそうです。和牛のオスと乳牛のメスの間に生まれた牛です。「雑」という文字から品質の低さを連想する人がいると思いますが、実際に食べてみると、そんな印象とはまったく違

います。和牛に近く、おいしい肉です。

岩淵畜産の生産者グループで実際に育ててくれている東日本産直ビーフ研究会は、「しあわせ絆牛」というブランドで交雑牛を市場に供給しています。千葉県内で生産した高品質の牛肉です。飼育して約2年後に出荷する「しまちゃん」は、全国の品評会で金メダルを取る意気込みで育ててもらっています。飼う以上、どうせなら最高品質をめざします。楽しみも増えますし、ワクワクするじゃないですか。

千葉県は日本の酪農発祥の地です。乳牛は妊娠させてから乳を搾るので、交雑牛はいわば酪農の副産物でもあるのです。

こうしたことは、私自身、牛を飼うようになって知ったことです。さ



Bリーグチェアマンに就任した島田慎二さん＝千葉県船橋市で（島田さん提供）

さまざまな知識や情報を私が発信すること、農産や畜産についてみなさんの理解が深まれば意義があると思っています。

——育てた牛はどうするのですか。

島田 児童福祉施設にいる子どもたちには食べてもらおうと思っています。千葉ジェッツ時代に取り組み始めたプロジェクトですから、いまのところ千葉県内の施設に預けられている子どもたち700～800人においしく食べてもらおうつもりです。市場で売ってもうけようなどというこ

とは、まったく考えていません。

——2頭目以降は？

島田 私のちよつとした社会貢献で、千葉県内の農業・畜産業の人たちがものすごく元気になったとか世の中のためになったとか、大きな効果が出てくれば、安いものだと思います。でも、こういう立場（Bリーグチエアマン）になってしまったので…いまの段階では考えていません。

1チームも破綻させない

——プロバスケットボールのBリー

グのチエアマンに就任されました。コロナ禍での就任、たいへんですね。

島田 プロスポーツなどのエンターテインメント産業は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を強烈に受けて、たいへんな状況にあります。Bリーグは、それぞれのチームがあつて存在しています。ですから、財務的に傷ついているチームの経営をいかにサポートするか。それが私の最初の仕事になるでしょう。

資金調達がままならなければ、Bリーグが代替調達して資金を供給す

Profile

しまだしんじ

新潟県朝日村（現村上市）生まれ。49歳。日本大学卒業。1992年旅行会社に就職。95年に退職後、法人向けや海外出張専門の旅行社を設立、売却。2010年に経営コンサルタント事業の株式会社リカオン設立し代表を務める。12年千葉ジェッツふなばし代表取締役社長、19年同会長を経て退任し20年7月、プロバスケットボール男子Bリーグチェアマンに就任。

Data

株式会社千葉ジェッツふなばし
千葉県船橋市を本拠地とするプロバスケットボールチーム。2011年、千葉ジェッツの名称でBリーグに参入。「ジェッツ」の名称は、千葉県成田市に国際空港があることと、ジェット機にちなんでつけられた。13年からNBLに移籍、16年にBリーグが設立されると、B1東地区に振り分けられた。19年4月からSNS大手・ミクシィの傘下に。

るとか、トップである私が全国を行脚して、経営を支援してくれる方たちにお願ひして回るとか。

また、こういう状況だから伸びている業種もあります。そうした方たちに、Bリーグの可能性を訴えて、新たなパートナーやスポンサーになつていただく働きかけもしたい。この苦境を乗り越えるため、1年ぐらひは汗をかきまくるしかないと感じています。

——「一つのクラブ（球団）も経営破綻させない」と、島田さんは会見で語っています。

島田 それが一番大事なことで思っています。しかも、そのことをトップがはつきり言うことが大事なのです。何か判断を迫られたとき、有言実行を果たすためにクラブ・球団をつぶさないことを優先することになりますから、決断が早まります。まわりの理解も得やすくなります。「もしかしたらダメかもしれない」みたいなことを言ったら、トップは務まりません。

苦しいときこそポジティブ

——また「暗いときこそポジティブに発信する」と言っていますね。

島田 世の中、いいときもあれば悪いときもあります。悪いとき、暗い

ときこそ、ポジティブ(前向き)に発信することに意義がある。コロナで打ち沈んでいるときに、バスケットボールで世の中を明るくすることが、Bリーグの使命だと思います。

クラブチームは決してつぶさない、ファンの方々に必ず安心して楽しめる場を設ける。そして、必ずコロナ禍を乗り越えることを、世の中にコミット(約束)します。

株式相場でいえば、いまは底値。あとは上がるだけです。厳しいときに引き受けたほうが、面白いともいえます。どのタイミングで、どんなアプローチで上げていくか。難しいことですが、それだけにやりがいがあります。

厳しい時代を乗り越えることで組織は自信がつくものです。みんながやりたがらないときに引き受け、乗り越えることで、私自身も成長する。これまでに何回か、厳しい組織のかじ取りを任されてきました。今回のBリーグチェアマンは、これまでと比べ、組織も大きいし条件もきついけれど、私としては前向きに「火中の栗を拾う」決断をしました。

「負け組」意識払拭がカギ

——「厳しいときのかじ取り」といえば、つぶれかけた千葉ジェッツの

経営を引き受け、後に人気ナンバーワンのチームに立て直しました。

島田 2012年のことですが、当時経営コンサルタントをしていて、千葉ジェッツの再建計画を作り出した。そうしたら、オーナーから社長をやってくれと言われ、「引き受けてくれないとつぶす」というので引き受けたのです。

——経営主体の明確化、資金調達力の強化、社内の士気の向上など、島田さんは再建計画を確実に実行しました。

島田 経営立て直しの方策は、一つではありません。あるべき方向性を示して社員に訴え続け、実際に一つ一つみずからやってみることが必要です。何が何でも、この苦境から脱出するんだという情熱をトップが見せ、細かなことでも一つ一つやりきる。すると、運気が向いてくるものですよ。

——とくに、社員の士気を高めたと聞きました。

島田 当時の社員の意識は「負け組」だったのです。バスケットボールはマイナーなスポーツでチケットが売れない、お客が入らない、スポンサーもつかない、だからお金もない。「貧すれば鈍する」で、お金がないとやる気も起きず自信を失い、みんな

下を向いていました。

それを、いまはしんどいけれども、がんばったらこんな世界が開けてくるといふ理念を示し、やれば必ずできると私は言い続けました。いきなり大きな成果は得られないけれども、小さな成果を得るたびに「やればできるよね」と激励しました。

大きな山に登ることを目標とするとで社員は自信を取り戻してくる。小さな目標をクリアし続けていけば、見える世界が変わってきて、日々の仕事への取り組みも変わってくるものです。

変化求められる農業界

——牛を飼うことで、農業とちよびり縁ができました。農業にどんな印象をもちましたか。

島田 いい商品を作り、供給していくという点では、ほかの産業と比べても、基本的には変わりません。人々の暮らしに絶対に欠かせない食べ物を生産するのですから、世の中に必要とされるすばらしい産業だと思えます。

しかし、生産するのが食べ物だけに、安全安心な農産物を作らなければならぬ。気候変動の影響や災害などの被害を受けやすい。事業とし

て継続することは、経営的には苦勞の多いことだろうと思います。

——農業界には「日本農業には競争力がない」という、いわば「負け組」意識があります。農業界に提言することはありますか。

島田 おがましいことを言える立場にはありません。一つ言えるのであれば、変わっていかなければいけない、ということでしょう。農業に限らず、他の産業もスポーツ界にも言えることですが、世の中の状況は劇的に変化しています。

牛を飼うことになってから、牧場に行ったり畜産業者から話を聞いたりする機会が増えました。すばらしい経営をしているところは、さまざまな機械を導入するなど、時代状況に対応して、ものすごい努力をしています。

とくにコロナ禍で、食の消費のあり方が激変しています。店内で食べる客が減る半面、「持ち帰り」や「宅配」が増えたとか。どの産業でも同じですが、時代や状況の変化に対応して変わっていかないと生き延びられないでしょう。

(ジャーナリスト 村田 泰夫)

☆

インタビューは6月15日、オンライン取材でおこないました。